

令和6年7月10日

教育推進機構久保田彩乃特任助教が 日本メディア学会第11回『優秀論文賞』を受賞

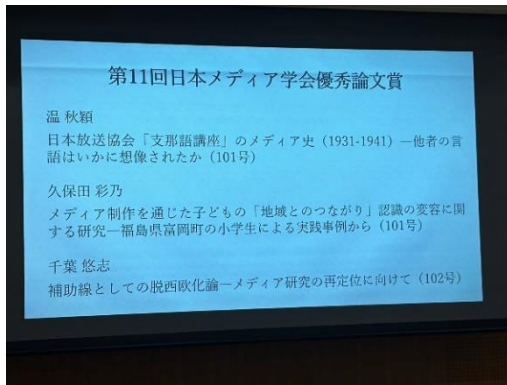
教育推進機構久保田彩乃特任助教が、日本メディア学会第11回優秀論文賞を受賞しました。同賞は機関誌『メディア研究』に掲載された論文の中から隔年で、将来性に富む優れた研究論文に対し顕彰するものです。2020年度に行った避難先で生活し仮設校舎に通う小学生とのメディア実践が「特殊な環境下における継続的・双方向的なメディア教育の実践報告として貴重な価値を有している」と評価されました。

日本メディア学会（旧・日本マス・コミュニケーション学会）では、機関誌『メディア研究』に掲載された論文の中から、将来性に富む優れた研究論文に対し優秀論文賞の授与を隔年で行っています。第11回（2023年度）は久保田特任助教を含む3名が表彰されました。

今回、久保田特任助教が受賞した研究論文は「メディア制作を通じた子どもの『地域とのつながり』認識の変容に関する研究—福島県富岡町の小学生による実践事例から」です。幼い頃に震災・原発事故による避難を経験し仮設小学校に通う小学5年生との映像作品制作の実践から、避難元地域を知らない子どもが、実践を通じて「富岡町と自身のつながり」をどのように認識していくのかを明らかにした実践研究です。「特殊な環境下における継続的・双方向的なメディア教育の実践報告として貴重な価値を有している」点、また今後の社会に対するアクションを伴う新たな研究実践であるという点が評価されました。

東京都武蔵野市の成蹊大学にて開催された日本メディア学会2024年春季大会において、令和6年6月15日に表彰式が行われました。震災・原発事故を扱った研究論文、また福島大学の受賞は初となります。

以下、授賞式当日の様子です。こちらの画像を使用されたい場合は、久保田までお問い合わせください。（画像は日本メディア学会から提供されています）



（お問い合わせ先）
教育推進機構・特任助教 久保田彩乃
電話：024-503-3416
メール：r416@ipc.fukushima-u.ac.jp

本件概要

◆学会：日本メディア学会

◆受賞：第11回日本メディア学会優秀論文賞

受賞者3名

機関誌『メディア研究』に掲載された論文の中から

隔年で、将来性に富む優れた研究

論文に対し顕彰するもの

◆表彰式：2024年6月15日（土）

日本メディア学会2024年春季大会

@成蹊大学

第11回日本メディア学会優秀論文賞

温 秋穎

日本放送協会「支那語講座」のメディア史（1931-1941）—他者の言語はいかに想像されたか（101号）

久保田 彩乃

メディア制作を通じた子どもの「地域とのつながり」認識の変容に関する研究—福島県富岡町の小学生による実践事例から（101号）

千葉 悠志

補助線としての脱西欧化論—メディア研究の再定位に向けて（102号）

論文概要

メディア制作を通じた子どもの「地域とのつながり」認識の変容に関する研究

—福島県富岡町の小学生による実践事例から—

久保田彩乃
(東北大学大学院情報科学研究科)

1. 問題の所在と研究目的

1-1. 問題の所在

東日本大震災、東京電力福島第一・第二原子力発電所の事故（以下、総称して「3.11」と呼称）から11年が経過した現在まで、福島において特に被災と避難を経験した地域の人々は未ださまざまな課題を抱えている。NHKが実施した「東日本大震災9年被災者アンケート」によると、暮らしや地域の復興について「復興した」という実感があるか、複数項目への回答が求められた設問の中で、「D.地域のつながり」について「（復興したという実感が）あまり実感が無い」との回答が最も多く25.8%であった。加えて、震災の「記憶の風化」について、多くの被災者が不安を感じていることが回答から明らかとなった。このことから、3.11避難の経験者は、未だ地域コミュニティ内部のつながりとその中の「記憶の継承」に対する願望を持ち続けているが、それはつまり、失った「通時的・共時的つながり」の回復を求め続けているものと言い換えることができる。

3.11避難により「通時的・共時的つながり」を失ったと感じている人々は、被災・避難のというだけでなく、地域の当事者でもある。彼らの願望のままざしは、本来であれば同コミュニティ内部に位置付けられ、地域の次世代を担うはずであった子どもたちに対しても、未だ向けられ続けている。3.11直後においては、それは自明のこととして認識されていた。大人も子どもも関係なく全員が被災・避難の当事者であり、避難元地域の当事者であると言えたからである。しか

◆論文タイトル

メディア制作を通じた子どもの「地域とのつながり」認識の変容に関する研究
—福島県富岡町の小学生による実践事例から—

◆掲載

日本メディア学会誌「メディア研究 101」2022年, 101巻, pp.195-214.
DOI : https://doi.org/10.24460/jamsmedia.101.0_195

◆概要

富岡町の仮設小中学校「富岡小中学校三春校」の2020年度小学5年生2名と共に、学校のアーカイブ記録映像作品制作を実施。その制作過程において、対象児童らが富岡町と自身のつながり（関係性や結びつき）をどのように認識し、またそれがどのように変容したかを授業内発言やインタビュー等から質的に明らかにした。

講評・評価点

◆ 講評

3.11後の長期にわたる避難生活の結果、避難元の自治体の記憶を持たぬまま育った子どもたちがいる。そうした子どもたちを対象としたメディア実践に取り組み、メディア制作を通じた調査対象者の変容を描く本論文は、特殊な環境下における継続的・双方向的なメディア教育の実践報告として貴重な価値を有している。また、社会に対するアクションを伴う新たな研究実践である点を評価する。

◆ 評価頂いた点

- ・震災・原発事故後の長期避難に伴う仮設校舎とそこに通う子どもたちの在り方の変化を、継続的なメディア実践教育の観点から明らかにしたという点
- ・今後の社会に対する応用実践・研究の可能性 ⇒「福島を教訓に」